



Title	ウズベク移民と日本社会：在日ウズベキスタン人移民の日本選択と新来在留外国人としての位置づけ
Author(s)	ダダバエフ, ティムール; DADABAEV, Timur
Citation	日本中央アジア学会報, 20, 76-77
Issue Date	2024-11-30
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.20.76
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98895
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	journal article
File Information	JB20_012dadabaev.pdf



ウズベク移民と日本社会

— 在日ウズベキスタン人移民の日本選択と新来在留外国人としての位置づけ —

ティムール・ダダバエフ

1991年の独立後のウズベキスタンは移民輩出国となり、ウズベキスタンからの移民の主な行先は文化的に馴染みがあり、同国でも広く使われるロシア語が通用するロシアやカザフスタンであった。ウズベキスタンからの移民にとって、日本は地理的にも心理的にも遠い「海外」として認識されており、文化的および言語的な違いも日本社会と日本の労働市場への浸透の障壁となっていた。しかし、近年の傾向から判断すると日本は、雇用、教育、専門能力開発、そしてより高い生活水準を追求するウズベキスタンからの移民の目的地になりつつある。在日外国人は、人数においては中国人、ベトナム人やフィリピン人などが圧倒的多数をしめている。しかし、在日ウズベキスタン人の全体数は少ないものの、その伸び率は近年加速しており、90日未満の短期滞在を除く、中・長期滞在者数は、1994年の20人から2020年現在4000人にまで増加している。地理的に離れ、文化的に異なっている中央アジアのウズベキスタン人が移民先として日本を選ぶ理由はどのようなものなのか。彼らが日本に移り住む動機と手段はいかなるものなのか。日本においてどのような状況に置かれ、日本社会をどのように理解し、自身の文化、宗教やその他の価値観と日本のそれとをどのように適合させているのか。ウズベキスタン社会の担い手たちが、今後ウズベキスタン本国の社会的変化にどうかかわっていくのか。

本報告は2023年6月に刊行された『ウズベク移民と日本社会』（東京大学出版会）の内容を紹介し、これらの問いに答えることを試みた。本書は在日ウズベキスタン人を日本へのニューカマーの最新例として扱い、彼らに対するインタビュー調査を通して、日本から離れ、文化や価値観の面では異なる移民の眼にうつる日本社会の魅力と、彼らの日本選択の理由を明らかにすることを目的とした。

在日外国人を扱う先行研究において、日系人、留学生の適応慣行、および留学生の日本社会統合過程などの研究は多いが、これらは日本の経済成長期（1955–1975）に日本に到着した「古い」移民を対象にした研究か、日本における欧米からの移民と学生の経験に焦点を当てた研究である。それに加え、歴史的に日本とつながりを持ってきた韓国人、中国人などの労働市場への参入を明らかにした研究もある。

しかし、本報告で紹介した研究は、ほとんど研究の対象となつてこなかった、日本への「新参者」のグループを代表するウズベキスタン人による日本での滞在に焦点を当てることで、日本への移住者が、歴史的に日本とのつながりが深い地域から、距離的に離れ、日本に馴染みがない中央アジアのウズベキスタンへと拡大していく傾向を分析する。

本書が取り上げるおもな問いは以下の3つである。第一に、日本に移住するウズベキスタン人が自身の移住をどのように解釈し、日本社会における生活を自身のこれまでとこれからの生活の中にどのように位置付けているのか。第二に、多くの選択肢がある中で、彼らは移住先としての日本という選択にどのような意味を持たせているのか。そして第三に、彼らは日本滞在中における自身のアイデンティティと日本社会ないし日本人のアイデンティティをどのように理解し、自民族の価値観と日本の社会的な規範をどのように受け止めているのか。

これらの問いに答えることによって、本書はウズベキスタン人の日本滞在中の2つの側面を明らかにした。第1の側面は、グローバルな移民の文脈における小規模な民族グループの流動性である。彼らの経験を調査し、受入国での滞在中の目的を探り、滞在中から移民への移行過程を解明した。第2の側面は、前大統領であるイスラム・カリモフの死去後、変わりつつある彼らの送出国であるウズベキスタンに対する彼らの認識と期待を明らかにした。

在日ウズベキスタン人に対するインタビューの実施と分析を通じて、本書は次の2つの議論を展開する。まず、在日ウズベキスタン人が他のディアスポラ移住者と同様に、恒久的な定住、または少なくとも長期滞在を求めているという信念を持っているのか否かを検証した。もし持っていないのであれば、在日ウズベキスタン人は同時に自国と受入社会である日本の両方の居住者として自分自身を位置付けているのかを調査した。

上述した在日ウズベキスタン人が、日本での長期的な定住を望んでいるという予想に反し、日本での滞在を一時的なものとして扱っている場合、彼らにとっての日本での「一時的な」滞在の意味合いを、インタビューを通じて明らかにするよう努めた。

第二に、本書は在日ウズベキスタン人が日々日本人にどのように接し、その接し方が彼らの「ウズベクチック」(ウズベキスタン人らしさ)というアイデンティティにどのように影響したのかを分析する。とくに彼らから見る「日本人論」が、自分たちのウズベキスタン人としてのアイデンティティの理解を深める手段になるのかを検証した。そして、在日ウズベキスタン人は日本における「滞在」をイスラームにおける「ムソフィール」(異国を遍歴するムスリム)として、いかに説明しようとしているのかを明らかにした。

(筑波大学人文社会系)